

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して：趣旨説明

主査：増田 研（長崎大学環境科学部／大学院国際健康開発研究科）

開催：2010年6月27日

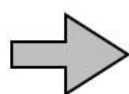
本研究課題の目指すところは表題の通りであるが、そのような最終成果が到達可能なところ、手の届くところにあるのかどうかは未知である。とりあえず、さまざまな研究手法と、各々の現場での経験を持ち寄ってネタを開示し合うことから始めるしかない。

共同研究の構想趣旨は課題の申請書に書かれているのでそちらを参照されたい。ここではその目的と問題意識について整理し直し、とくに参加者の多くを占める文化人類学者にとっての意義を考えてみたい。

この研究課題の目的は多岐にわたるが、究極のところは1つ、個別のものを数え上げると3つくらいにまとめることができる。

共同研究を組織する目的

- **General Purpose**
 - 異なるフィールド調査手法の融合を目指す。
- **Specific Purpose**
 - 質的／量的調査、対象限定的／ホリスティック・アプローチ、共時的／通時的アプローチなどの異なるアプローチの相互理解の促進。
 - 文化・社会人類学、国際協力、国際保健学、看護学、生態学、地理学、GISなどの異なるディシプリンの相互理解の促進。
 - 異なるアプローチとディシプリンを組み合わせ、融合させることで、より幅広く社会に貢献できるフィールド技術の提案。



技術の融合、世界観の対話

General Purpose

異なるフィールド調査手法の融合を目指す。

ここでいう「融合」が具体的にどのようなものになるのか、企画した私にもうまくイメージできていない。それは「融合」よりは、むしろ「協働の理想型」のことかもしれないし、「棲み分け」のことかもしれない。

私の本意は、多様な研究対象、多様なディシプリン、多様なアプローチがあるなかで、そうした調査技法の相対的な位置関係を自覚的に探ること、そしてそれらの背後にある世界観を馴染ませることに意味を見いだすことである。そのためには、開発のような「具体的な達成目標のある」分野の枠内で議論する方がやりやすいであろう。研究の題目を「社会開発分野における～」としたのはそういう理由からである。よって共同研究員はからなずしも開発にかぎった話題を提供しなくともよいと思う。

Specific Purpose 1

質的／量的調査、対象限定的／ホーリスティック・アプローチ、共時的／通時的アプローチなどの異なるアプローチの相互理解の促進。

Specific Purpose 2

文化・社会人類学、国際協力、国際保健学、看護学、生態学、地理学、GIS ナドノ異なるディシプリンの相互理解の促進。

Specific Purpose 3

異なるアプローチとディシプリンを組み合わせ、融合させることで、より幅広く社会に貢献できるフィールド技術の提案。

ここに挙げた二項対立はあくまでも一例にすぎない。アプローチの違いは「どのように知るか」の違いであるが、同時に「何を知りたいのか」の違いでもある。その違いを私たちはアプローチの違い、ディシプリンの違い、分野の違いとして語るが、それは他方で「ものの見え方」の違いに反映されるだろう。

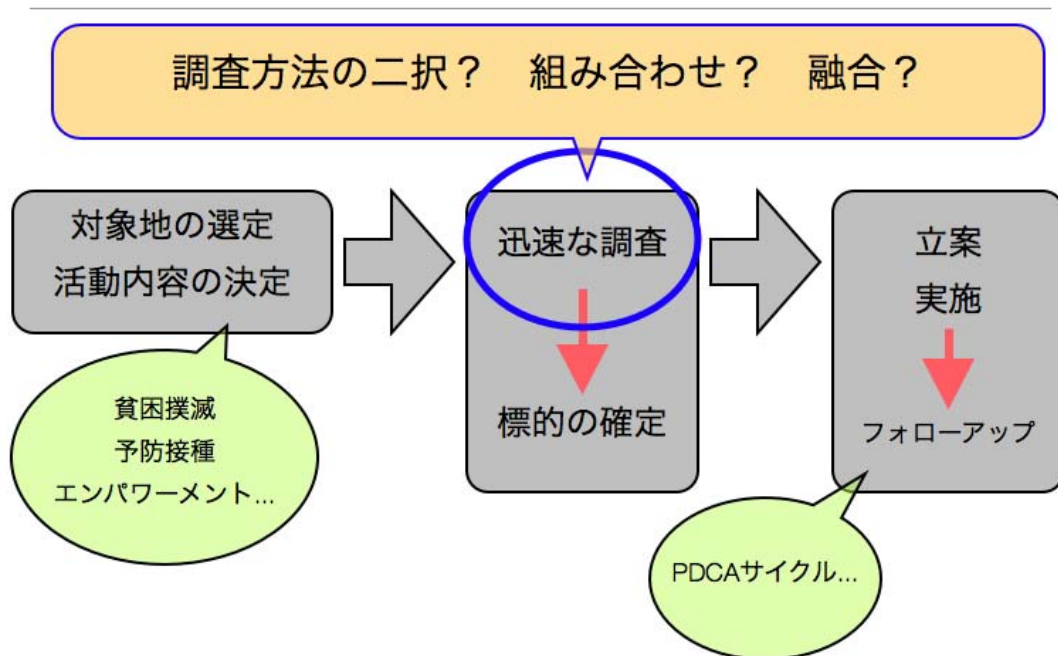
アプローチが異なると、同じものを見ていても、違ったように見える。「私たちはこのようなやり方で見たので、このようにしか見えませんが、他のやり方で見れば違って見えるかも知れま

せん。悪しからず」という但し書き（言い訳）を論文の「方法」のところで書くことがあるが（リミテーションの明示）、異なる見え方があるのであれば、それらをどのようにすりあわせて新たな像を結ぶべきかという議論もあって然るべきである。

定性的研究と定量的研究

ここからは、いわゆる質的研究と量的研究について触れておく。まずは社会開発のプログラムにおいて、調査がどのような位置にあるのかを（若干戯画的ではあるが）見ておこう。

いわゆる「量的サーベイ」と「質的インタビュー」



社会開発のプログラムにおいて、調査は標的の確定のために行われる。

いまここに、とある開発途上国 A における健康教育（ヘルス・プロモーション）を推進するプロジェクトが企画されたとしよう。まずは当該国 A において、どのような健康問題が深刻であるかの調査が行われる。A 国が、あるいは WHO などが実施した統計資料を参照すると、5 歳未満児の死亡率（under five mortality rate）が著しく高く、また下痢による死亡率が高いことが明らかである。対象地は A 国のどこか、活動内容はひとまず「下痢による幼児死亡率を低下させる」と決まる。

さてここで次なる調査が必要になる。フィールドにおける調査である。その目的は具体的な活動内容の策定に寄与する何らかの発見を得ることである。なぜ 5 歳未満児が下痢になるのか、水が悪いのか、それとも保健行動の欠如か、医療施設はあるのか、それはどのくらい遠いのか、人

びどの医療施設への関心はいかなるものか、実際にどのくらいの頻度で下痢を発症するのか、栄養状態はどうか、脱水症状への理解はあるか、ORS についての知識はあるか、知識があったら使用しているか、等々。

この一群の問いと関連して、たとえば集落の人口、年齢構成、出生率、職業、生業、経済状態、教育程度などが調べられる。経済状態などについてはさらに、家屋のタイプ、屋根や壁の素材、水の供給源（井戸か、水道か、川か、水たまりか）、電気の有無、電話の有無、自転車の有無…と延々と調査リストは続く。

こうした調査項目はある程度フォーマット化されている。こうした項目がならんだ選択回答式のクエスチョネアが用意され、なるべく多くのサンプル数を稼ぎ、データのクリーニングを経たのちに解析にかける。こうしたプロセスを経て明らかになった相関関係から、「5 歳未満児に下痢で死亡する要因」があぶり出される。あぶり出された「要因」(factor) は、その後、開発プログラムにおいて「標的」となるであろう。

社会開発、とりわけ国際保健において「要因」という語が頻出するのはこのような理由による。もちろん肺ガンのリスクファクターが喫煙にあると分かって、「では喫煙を禁止しましょう」ということになっても、それが言うほど簡単ではないことはみなさんご存じの通りである。

社会開発のプログラムに資する調査において、重要なのは迅速性である。すばやく、必要な情報を拾い上げ、提言にまとめ上げられる調査。ここでいう「必要」というのは、もちろん「開発援助実務者側」にとってのニーズである。実務者にとっては、文化人類学者がやるような長期間の現地滞在と現地語習得というプロセスによる参与観察型フィールドワークは、時間がかかるだけのムダな営みにみえるらしい。

人類学的フィールドワークが「ムダ」に見えるのは、時間がかかるという理由だけによらない。たとえば、その発見のプロセスと質もまた「使えない」ものであったりするのだ。

参与観察型フィールドワークでは、現地に長く滞在することで得られる「予期しない発見」が大きな力を持つ。そうした予期し得ない発見を期待するあまり、人類学者はとりたてて驚くべき成果が上がらなくとも「ひとまずフィールド通いを続ける」ことを良しとする。だが、こんなやり方は開発実務者には通用しないだろう。一つのプロジェクトが3年間続くとして、そのうちの一年間をリサーチに充てるなどもってのほかである。

他方で、人類学者が持ち帰ってくるデータの質についても疑いの目が向けられている。私の知るかぎり、文化人類学者の調査は「質」的なものが中心である。社会構造の記述のようなエスノグラフィックなものから、歴史的脈絡化 (contextualization)、パーソナル・ヒストリーの収集にいたるまで、その多くが「質」的な記述に充てられてきた。

さて、A 国における5 歳未満児の下痢による死亡を低減させようとするプロジェクトは、いま

や2つのアプローチによる、まったく質の異なるリサーチ結果を前にしている。一方は、下痢を誘発するリスクファクターの洗い出しを行った疫学的な調査結果であり、人びとが清潔な井戸水よりも川の水を好んで飲用にすることが下痢症を誘発する要因だと指摘する。もう一方は、人びとがなぜ川の水を好むのかという問題についてのインタビュー・トランスクリプションの塊であり、「井戸は遠くて行くのに面倒くさい」とか、「井戸の水は鉄臭くてまずい」とか、あるいは「川の水だってちゃんと祈ってから飲めば大丈夫なんだよ」などという語りで満たされている。

前者はサンプル数も十分な、代表性を備えた傾向を語るに十分な量的サーベイである。

後者は、ひとつひとつの事例が固有性を放つ、「言語化された認識」の質的記述である。

両者のどちらが人びとの幸福に寄与するのか、という問いは、それほど意味をもたない。この問いをパラフレーズすればこうなる。「一体どちらのフィールド技術が役に立ちそうなのか」と。

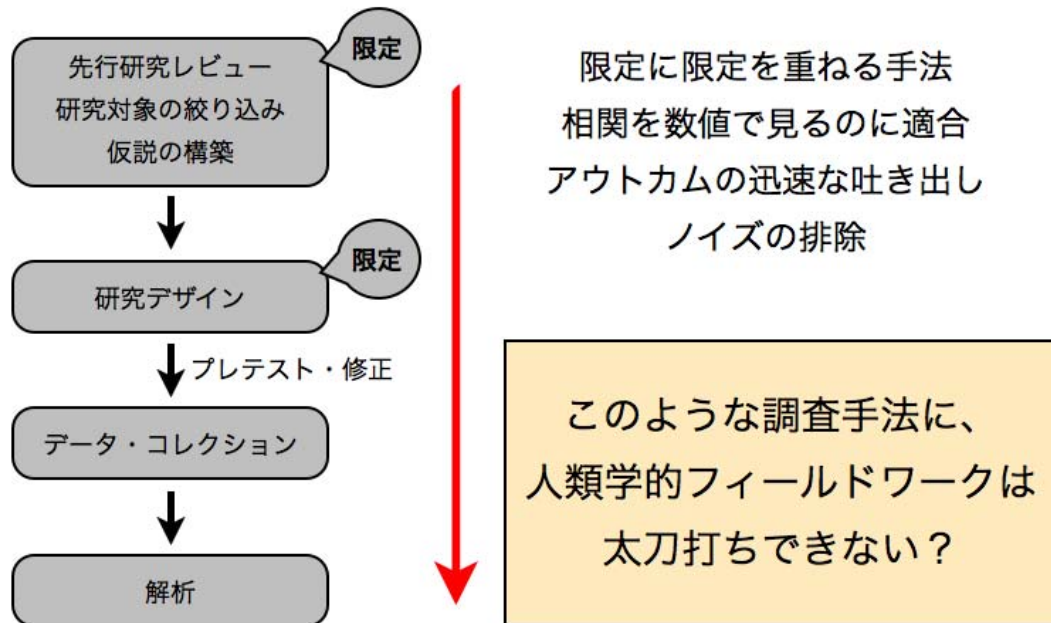
その問いに対して、私ならこう答える。「どちらにもリサーチメソッドとしての得意な技と苦手な技がある。フライング・ボディプレスと海老固めが、まったく異なる効果をもたらすように、量的研究と質的研究は、ものごとの異なる側面に光を当てるのだ。よって「どちらか役に立つか」という問い自体が意味をなさい。

「早く仕事を始めたい実務者のニーズに適合しているのはどちらか」という問いの立て方なら、まだ意味がある。ただしその場合は、あくまでもニーズが「実務者の」ニーズであることに再度注意を喚起しておく。

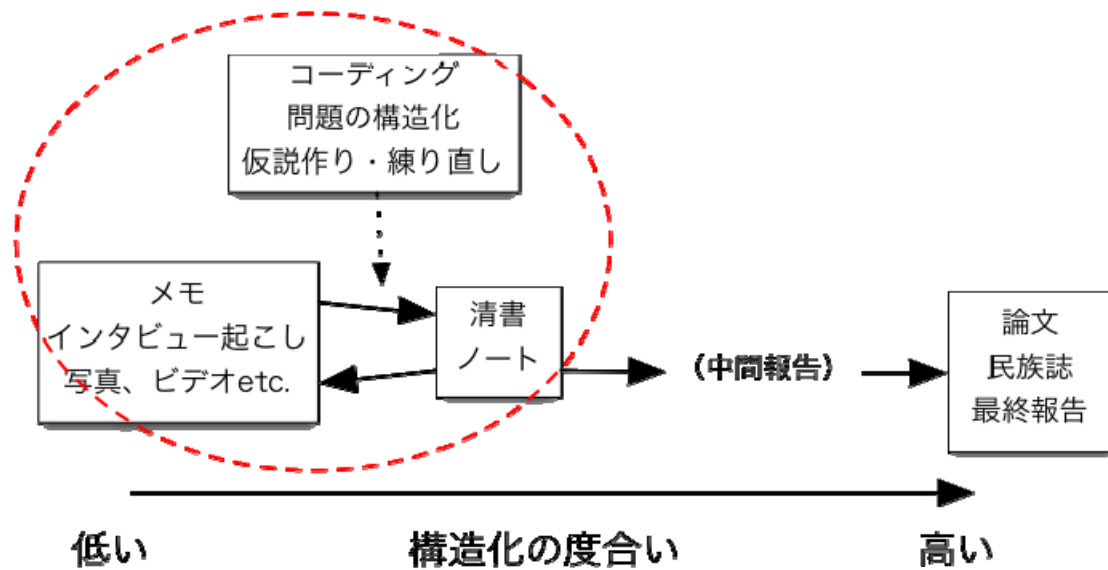
フィールドにおける単線的／螺旋的指向運動

ところで、素早く、たたらと時間をかけずに結果 (Result) を得るためには、あらかじめリサーチのクエスチョンとデザインを明確にさせておかなければならない。そこでは「理論的な再検討を施したうえでの分析枠組みの再設定」であるとか、「現場で考える」といったプロセスは、プログラムの企画書に書きにくいどころか、書きようもない。ここで私が考えたいのは、フィールドワークの単線的プロセス、あるいは単線的思考運動の特徴である。もちろん、参与観察型の人類学的フィールドワークとは対照的なものとして考えるのである。

フィールドにおける単線的／螺旋的思考運動



対象を絞り込んで、調査項目を限定し、リサーチ活動をスマートかつシャープなものに仕上げていくことで、とてもスッキリした結果を得ることができる。「絞り込み」の過程ではつねに、「仮説は何か」「どのようなアウトカムを得たいのか」が問われる。〇〇と××の相関があるというアウトカムが得たい、という意図があれば、〇〇と××の相関がはっきりと出るようなデザインを考える。ここまで準備して、フィールドで行う調査（データ・コレクション）は、ほんの数日で、しかも大人数のデータ・コレクターを配置することで実施される。集められたデータは入念なチェックを受け、汚いデータ（欠損があるものなど）はキレイに取り除かれたうえで、解析にかけられる。結果がうまい具合に有意な相関を示してくれればいいし、それがなければ別の要因との相関が調べられる。なににせよ、現場でやるのはデータ・コレクションと、その前段階のごく一部である。



ところでエスノグラフィックな質的調査においては、先行研究サーベイ（あるいはさまざまな教養を身につける読書）は「ホーム」で行うものの、リサーチのデザインやらなにやらは「フィールド」で行うことが多いだろう。量的研究がエティックなアプローチを採るのに対して、人類学者はイーミクなアプローチを採るからだ。その「リサーチ」はおおむねラフな観察からはじまり、やがてインタビューが企画・実施され、その読み込みから次なるアプローチが考え出される。つまり上図にあるような「データ収集から清書」へのプロセスが数次にわたってフィールドで繰り返され、次第に問題の構造化の度合いが高まるというような螺旋的な思考運動が展開されるのだ。

断っておくが、統計や疫学といった量的研究がすべて単線的思考をするといけないわけではない。特殊なタンパク質の分離を試みるような実験室科学であればもちろん、機材と試料に囲まれて終わりの見えない螺旋的思考（あるいは行きつ戻りつ）を繰り返しているはずだ。よほどの「ヒット・エンド・ラン」調査でないかぎり、まともな研究はみな螺旋的な思考プロセスをたどるのである。だが人類学的／エスノグラフィックな研究ほど、そのプロセスにおけるフィールド滞在を重要視する分野もないだろう。

私の関心は、このような人類学的手法と、そこから得られる雑味豊かな成果は、やはり社会開発のような世界では統計的手法にかなわないのであろうか、ということである。人類学者は風味豊かな「どぶろく」を好むが、実務者や「理系の人びと」はやはり端麗で辛口の「のどごしスッキリ」ビールしか好まないものであろうか？

いわゆる量的サーベイと質的インタビュー

いわゆる「量的サーベイ」と「質的インタビュー」

- 社会調査における二大区分

- **量的調査**（定量的研究、quantitative study）

「数値的根拠のある疫学的データ
や空間情報システム」
システムティックなトレーニング

- 大規模アンケート調査、選択式質問項目、ソフトウェアによる解析

→ある程度予期されるアウトカム、常に気にされる「サンプル数」

- **質的調査**（定性的研究、qualitative study）

「根拠が弱く処理の難しいナラ
ティブ」 トレーニングも難しい

- 「深いインタビュー」、オープンエンドな聞き取り、言葉による記述

→予期し得ない「何か」への期待、事例の個別性

文化人類学の世界では、調査が質的か量的か、などということは長いこと問題とされてこなかった。私自身は東京都立大学大学院の出身で、同居していた社会学の院生たちが、数千枚のアンケートを SPSS で処理しているのを目の端でチラ見することで「へえ。こんな調査をして何が楽しいんだろう？」と思っていたくらいだ。

質的とか量的といった分類は、社会調査の領域で使われるものである。もちろんどちらにも特異な点と不得意な点があるが、社会的なニーズという点では量的のほうに軍配が上がるだろう。

私は、いわゆるオープンエンドなインタビューのなかでも、とりわけオープンな「おしゃべり」調査を得意としており、データの数値化にはほとんど関心がなかった。基本ポリシーは「数字で示せるものは数字で示してしまえばいい」というくらいで、疫学者が聞いたら卒倒するくらいの軽い扱いしかしてこなかった。たとえば2001年に書いた「武装する周辺」（『民族学研究』所収）では、村で見つけたカラシニコフ銃の生産国を数え上げたが、「エチオピア南部で用いられるカラシニコフ銃には中国製が圧倒的に多い」という結果を示すのにはパーセント表示をした。それは数字を出すことでしか説得的に示せないタイプのデータだからである。

だが私にとって数字は、せいぜい社会のバックグラウンドを示すためにしか使われず、そのほとんどは「深いインタビュー（in-depth interview）」のための地均しでしかない。

ところで、こうした質的調査は、そのトレーニングがシステム化されにくい。調査者のパーソナリティに依るところが大きいし、それ以上に対象とする人びとに依存する面が強い。オープ

ンでおしゃべり好きの人びとが相手なのと、警戒心むき出しで小声でしか話さない人びとが相手なのとでは、ナラティブの引き出し方には大きな違いが出る。

こうやって書いていくと、文化人類学的な調査方法など、社会のニーズに応じるには不向きであり、新聞記事以上のものが期待できないと思われても仕方がないのかも知れない。しかし、私はそれでも、質的調査と量的調査は相互に補完的であるべきだと思うし、数値の解析によってあぶり出された「傾向」や「要因」についても、それぞれの歴史的脈絡、社会的脈絡、パーソナルな脈絡を織り込んでこそ「傾向」や「脈絡」だと思っている。

どのようなアプローチを採るにせよ、調査をする人間に「知りたい」という欲望があることには違いはない。ディシプリンの垣根を払い、アプローチの違いを乗り越えるためのアイデアを、この研究会で議論したいのだ。